

元会員の山崎泰三さんより、応援メッセージをいただきました。

山崎さんは停年退職後、中国での1年間の語学留学を経て、2000年、本会に入会されました。初代事務局長としても5年間活動、その後、体調を崩されたこともあり退会されましたが、現在も日本語支援に携わっておられます。 稲谷いく子

～老師～

山崎泰三

約15年ほど外国人へ日本語を教えてきたが、ようやく、かすかに見えてきたものがある。教育などと大げさに言う程経験もないし、実力もない。国籍、性別、年齢、学力、習慣、生活、職業、環境・・・等々の一人々違う外国人に教えるのである。レベルが同じなら、それでもなんとかなる。日本で、入学試験を突破してきた学生に教える先生方が時折、羨ましくなる。

最近是中国だけの生徒なので、幾分楽かと思っただが、これが思いもよらず厄介なことに直面させられるのである。なんと！50代、60代になるまで、一度も学校へ通ったことがないおじさん、おばさんが我が教室に飛び入りで入ってくるのである。母国語は話せるが、読み書きが一切出来ないし、嘗て一度も習ったことがないのである。いわゆる”文盲”というやつである。このような人々は中国には約8%いるそうである。全人口が13億人とする1億人強となり、日本の人口と同じくらいの間人が、一度も学校へ行ったことがなく、母国語で読み書きが出来ずに大人になってしまったのである。中には小学校へ3年までとか、4年まで通ったことがあります、なんて生徒がざらにいるのである。中国の教育行政は一体どうなってんだ？と、一時は疑問も怒りも湧いたのであるが、原因がやっと分かった。問題は実に簡単であった。中国は、小学校の一年生から学費が必要なのである。お金の無い親は、子供を学校へ通わせることが出来ない。実に簡単明瞭である。日本人の我々は、義務教育は無料だとばかり思っていたので、理解出来なかったのである。

そんなおじさん、おばさんに外国語である日本語を教えるのである。毎日が試行錯誤の連続であり、悩み、苦しみ、時には仲間に相談しながらの授業である。そんな中で、最近ふと気付いたのである。“悩み苦しむことこそが教育なんだ”と。もう、これからは、どんな人が来ても教えてやろう！ この人達は、私が拒否したら一生字を読む楽しさも書くこともなく終わるのである。このような人に教えることこそ「教育であり教育の原点なのではないのか？」と。

私は、偉そうに心の中で、おじさんおばさんに教える先生だと思っていた。しかし、私にこんな大事なことを教えてくれた、あの、おじさんおばさん達こそ私にとっては、偉大な先生(老師)だったと気がついた。

やっと分かったところで、我が人生も終末点に近づいてきた。まさに「日暮れて、道遥かに遠し」である。それでも”驚馬の如く”トボ々と歩み続けて行くだけである。